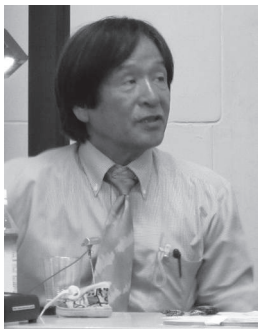
V

都市デザイン担当設置から初期の活動

平成 22 年 10 月 13 日



講師

国吉直行

鈴木：この「都市デザイン論Ｂ」はきょうから「都市デザイン論Ａ」から続く連続講座として再スタートします。これまでの2回で、横浜の都市デザインが始まるまでの前史的な部分を、私が説明しました。きょうからは、実際にそれを担当された方に直接、お話を聴きながら、横浜の都市デザインというものがどういうふうに成り立ってきたのか、ということを中心に進めたいと思います。

本日のゲストは、横浜市上席調査役で、横浜市立大学の教授をされていらっしゃる国吉直行先生です。

国吉さんは早稲田大学を卒業後、横浜市に1971年5月に入庁されて、以降、一貫して横浜の都市デザイン行政に関わり続けていらっしゃいます。ほぼ40年、一貫して関わられている、というのは日本の行政の仕組みの中ではかなり異例なことです。だいたいの場合、一つの部署を3年ぐらいでどんどんローテーションしていくので。基本的に行政というところは、ジェネラリストを必要として、スペシャリストはあまり必要としないような風潮が一時期非常に強くなっていました。近年は、行政の中のスペシャリストという存在が再び注目されるようになり、国吉先生がやってこられてきたものも、横浜の都市デザインが40年目を迎えるに当たって、改めて注目されているのではないかと思います。

きょうはまずは、市役所に入られてからおおむね10年間、初期の都市デザインの取り組みがどんなふうに成り立っていたかについて、私が国吉さんにインタビューする形式で進めていきたいと思います。

まずは国吉さんが大学時代、経験されたこと、それから横浜市に入られる経緯について、お話を頂けますか。

国吉：私が早稲田大学の学部を卒業したのは1969年（昭和44）、ちょうど東大闘争をやっている年ですね。早稲田大学で建築学科にいました。入った動機は、建築家になろう、建築のデザインをやろう、ということでした。高校時代に丹下健三の仕事を知って、丹下健三みたいなことをやろう、ということで。美術の授業で、丹下健三が手掛けた大分の高校の校舎を紹介されて、いい仕事だなと思って、建築科に進もう、と決めました。大学の特性はよく知らなかったのですが、たまたま試しに早稲田に入ったら、早稲田の建築はいいらしい、ということで。

私は九州出身で、九州は貧乏で、私立大学なんてとてもじゃないけれど行けない、受験の対象になかったのですけども、たまたま受けたら通ったのです。高いからやめようかな、と思ったのですが、うちの兄貴が芸大のグラフィックデザインに行っていて、友達が、建築のデザインだったら早稲田がすごくいいから行けば、というので無理して入った。そんな感じです。

結果的にそれはよかったと思うのです。そこそこいろいろなデザイン・コンペなどに応募して入選したりして、結構いい線、行っていたのですね。学生時代の2年から3年の作品が、全部、参考作品で大学に残っています、それぐらい、その時は光っていて、このまま順調に建築の、一流デザイナーの道をまっしぐら、という感じでいたのです。

ところが70年安保とか東大闘争とか、そういう時代に遭遇しまして。早稲田大学にいて、東大闘争の最中に、東大の人から応援に来ないのか、とかいろいろ揺さぶられまして、ちょこちょこ、東大の近くに行ったりしたのです。早稲田の建築の場合、卒業設計が「最後の花」なのですね。ところが、東大闘争のことで結局、何にも手が付かないのですね、図面なんか。それで、締め切りの2週間ぐらい前になってようやく卒業設計を始めたのです。それでも学年で一番の枚数の30枚を出したのですけれど。というのは学生時代、僕の設計を手伝う後輩がたくさんいたものですから、卒業設計の時に後輩30人集めて、30枚の作品をつくろう、ということだったのです。

その学生闘争とか学生運動、安保闘争などを通して「建築家は世の中に何を成しているのか」みたいな問い掛けが行われていて「そう言えば丹下さんとか一流の方々が、東京計画1970とか、いろんなプロジェクトを提案するけれど、何もできてないな。で、どうなっているのだろう」とか「建築家は自分の作品はつくるけれど、都市は全然よくなってないんじゃないの」というような疑問がちょっとあった。学生時代からアル

バイトで丹下事務所とか大高事務所とか、一流の建築家の事務所に出入りしていたので、そういうところに入ろうと思えば入れたのです。また、ゼネコンの設計部にも入れたと思うのですが、ちょっとそれには疑問を持ち始めました。

そういう中で大学院まで行ってしまったのです。大学院時代は、学部のように建築デザインばかり、というわけにはいかなくて、もう少し、世の中のことを考えるようになっていきました。

鈴木：学生時代、影響を受けた先生とか、学部、大学院の時に師事した先生など、ご記憶ありますか。

国吉：学生時代、作品を見て回ったのは磯崎新と菊竹清訓。その二人が好きで、九州から山陰に掛けてずっと見て回りましたね。案外、丹下さんは見てなかったですね。丹下さんは日向市民会館とか見たら、大したことないと思ったり。でも、スケッチはしてきましたけれどね。

学部の卒業論文の時に師事したのは、早稲田では吉阪隆正という人です。卒業論文はフィールドワークをしました。当時、デザイン・サーベイというのがはやっていて、その10年ぐらい前から伊藤ていじという方を中心に、日本の伝統的空間というものを調査する。例えば、宇和島の石垣のある海岸沿いの港町とか、そういう伝統的な集落などを学生がフィールドワークしていたのです。私もちょっと面白いなと思いました。

卒業論文でフィールドワーク

早稲田は卒業論文と卒業設計と両方あって、卒業論文は確か10月に提出しました。夏休みにフィールドワークをして10月に発表する。その対象地区を長崎市の大浦地区というところにしました。大浦天主堂のある反対側の南斜面、グラバー邸の反対側、斜面住宅がある。そこの階段状の集落が面白いな、その集落調査に行こう、ということで、早稲田の同じ学年で9人のチームをつくって、生活班、空間班、歴史班の三つに分かれて、僕は空間班ということで測量して回ったわけです。うねった階段とか、まち並みをずっと調査したり、といっぱしのデザイン・サーベイをやってみました。結局、卒業設計は、大浦地区をどういうふうに工夫していくか、という大浦地区への提案というようなことになったのです。それでちょっと、建築からまちへ、という発想が出てきた。そんな感じがあります。

大学院に進む時に、吉阪研究室に行こうと思ったのですが、吉阪研究室はオーバードクターみたいな人がたくさんいて、新人が入っても机ももらえない、という状態で、人気があったのですね。そこをちょっと避けて、穂積研究室という非常に紳士の先生の、できたばっかりの研究室があって、そこを、僕らが行って全部乗っ取っちゃおう、と思ったのですね。同級生5人で入って、その研究室で堂々とスペースを確保して。そんな感じだったのですね。

大学院の2年の時にヨーロッパのペルージャという都市が国際コンペをやったのですね。ペルージャの新都市をつくろう、というものです。その後、サッカー選手の中田英寿が行ったまちです。そこのコンペに応募しようとして、応募案を作ったりしました。そういう海外のスタディーなんかもして、やっぱり都市へ、という感じが非常に強くあった。

その頃、建築学会の関東支部の論文募集に応募したのです。実は建築学会の設計コンペは、学生の3年の時から入選していたのですよ。その関東支部が、建築学会は曲がり角に来ている、今後どうしたらいいだろう、ということで論文を募集したので、私は「私が入選した図書館のコンペとか、いろいろな施設のデザイン・コンペがありますが、こんなことばっかりやっていても、世の中あまり変わらないんじゃないか。もうちょっと建築学会もまちを考えるようなコンペもやったらどうでしょうか」というふうに提案した。

そうしたら、建築学会の事業委員の先生から、「あなた、うちの事業委員に入りなさい。それであなたの言ったことをやってください」と言われて建築学会の事業委員にされたわけです。日大の近江榮さんとか、この前まで日大総長だった小島勝衛さんとか、そういうお歴々が委員をやっている委員会で、学生ながら私も事業委員になったのです。

市役所に行くと田村明さんが…

私が、じゃあ、建築学会でどこをやろうか、と考えた時に、親戚が横浜にいたので、よく横浜に遊びに来ていて、その親せきのうちに行く時に、どうも気になる場所がある。それは東横線の高架線の向こう側に造船所がある、ということです。「こんなまちの真ん中に、こんな造船所がいつまでも居座れるわけがない。これは当然、出て行かざるをえないだろう」というふうに直観的に思っていて、長崎でスタディーをしたとか、そういう経験もあったものですから、ここを動かしたらどうなるか、ということを建築学会が提案しよう、それをコンペでやっちゃおう、ということを考えたわけです。

そのコンペを企画するには、コンペの資料としてベースマップを作る必要がありますよね。それで、ベースマップを下さい、と横浜市役所にお伺いしなければならない。私のいた早稲田大学というところはどうも役所嫌いで、早稲田の建築学科は役所アレルギーを起こす人ばっかり。私も学生時代は、役所はどうも行きにくい、行きづらいという感じがあったのですけれど、背に腹は代えられないので、ベースマップを下さい、とお願いに行ったわけです。

その時にお会いしたのが田村明さんだったのです。実は、田村明さんのことはその前に知っていたのです。『新建築』という雑誌で、「第三の建築家」という紹介があって、浅田孝と田村明という人が、建築家なのだけれど都市に何か挑んでいる、と。いわゆる土木系の都市計画ではなくて、建築系の都市計画をやろうとしていて、空間の問題とか、そういうのを仕掛けようとしている、と。それを読んで、ちょっと面白そうな人だな、というふうには思っていたのですが、田村明さんがいきなり出てくるとは思わなかったのです。

その時は、学生の私が一人で行ったら相手にしてもらえませんので、事業委員の大学の先生二人ぐらいを連れて行きました。田村明さんに、「こういうことでやりたいんです。あの造船所をどけるための提案を、建築学会がしますよ。いいですね」と言って「ベースマップを提供してください」と言ったわけです。そうしたら「それは横浜市は既に考えている、仕掛けている。建築学会で変な騒ぎを起こさないでくれ。相手ともまだ全然うまく行っていないところで、建築学会まで騒いだら、また横浜市が仕掛けて何かやらかしている、と話がおかしくなるから、ちょっとやめてほしい」と。

それで困ったら、逆に向こうの方から、実は来年3月に、本牧というところにある米軍キャンプの住宅地が返還されることになっている。そこはいろいろな土地が入り乱れていて、いずれ、まちを整理しないとまずい、つくり直さないと駄目だ。そこを考えるための材料として、建築学会がコンペをやっていただけると、ありがたいのだけど、というふうに言われたのです。それで、そっちに乗せられちゃって、分かりました、そっちをやりましょう、ということで、新本牧を建築学会が提案する、というコンペを行うことになりました。

あぜ道に戻すわけにいかなくて

その当時の新本牧は、青々とした芝生の中に、ポツンポツンと住宅が建っていて、鉄条網のこっちは密集市街地で、あちらは魅力的なまちで、その脇にPXという米軍専用のマーケットがあって、というところで、私も学生時代、時々、本牧辺りのディスコなどに、お金がなかったので入ることはなかったのですけれど、のぞきに行くとかはやっていたところです。そういう「異国」があったわけですね。

もともとその土地は田んぼだったのですよね。田んぼのあぜ道なんかがあって、ちょこっちょこっといろんな土地があったのを、半分ぐらいは地主から土地を国が買い上げてしまって、半分ぐらいは地主の土地が残っていて、それを米軍がバサッと芝生と住宅にしていました。もともとあぜ道しかないまちですから、そこを返還されてから、あぜ道に戻して地主に返しても、まちとして使えないわけですね。ではどうしたらいいか。そのまちを考えなければ駄目なので、建築学会、考えてください、ということでコンペをやりました。

そういうことで、横浜市と付き合うことになって、田村明さんも吉阪隆正さんも審査員にした。吉阪さんは、さっき言ったように早稲田の教授です。田村さん

は都市計画をやっていましたから。

　そういうところが、横浜市入るまでのことです。

鈴木：田村明さんは、横浜市に入る前に環境開発センターにいましたね。その環境開発センターを主宰されていた浅田孝さんは、早稲田大学で非常勤講師をされていた、と記憶していますけれど、学生時代に浅田さんと接触はあったのでしょうか。

国吉：あまり接触はないのですけれど、実は向こうは知っていたのです。

鈴木：それは、成績のいい学生ということで、ですか。

国吉：結構、有名だったらしいのです。後で、横浜市に入ると、浅田孝さんが「国吉は3年でどうせやめるよ」「あいつ、絶対勤まらないよ」とか触れ回っていたらしいです。

鈴木：そうですか。その本牧のコンペがきっかけになって、横浜市に入ることになったのですか。

国吉：そうですね。先ほど言いましたように、すんなり建築家の事務所に入るモチベーションが湧かない。あこがれていたのは、浦辺鎮太郎いう建築家です。倉敷レイヨン出身で、倉敷にこだわって建築をいろいろとつくっている。だから倉敷には浦辺さんの建築が大原美術館とかたくさんできている。同じまちに関わってやっていくと、まちとしてのストックができるのだな、と思いました。だから一つの生き方として、あるまちにこだわる、という生き方があるかもしれない、と思ったわけです。

　そういうことから、建築と都市がどういうふうに関わるべきか、ということのヒントを得るためには、ちょっと東京を離れて、どこかの地域に3年ぐらい生活してみよう、と。金沢に行く話、金沢の大学の専任講師に来ないか、という話とかいろいろあったのですけれど、たまたまそういうことで田村さんとも横浜市とも付き合った。市役所というところも、よく考えると、イギリスの建築家などを割とステップにして学ぶ場所なのですね。そこである程度、社会性を身に付けた後に、その都市の建築家になる、というルートがあったので、最も嫌いな役所にちょっと勉強させてもらうために、入れていただこうかな、ということになったのです。

　その4月中旬に飛鳥田市長の選挙があったのです。第3期目の選挙で、当選した次の日に田村明さんのところに行って「当選おめでとうございます。飛鳥田さんが当選したから、田村さん、続投ですね。続投だったら、私を雇いませんか」と言って交渉したのです。「ご存じの通り、私は都市についてちょっと勉強したいと思っているので、ちょっと居させてください」と言ったら、「君は試験を受けていないから、正職員にはなれないよ」と言われて、「ええそれで結構です」と言って、嘱託という形で入れていただいたわけです。

鈴木：当時、その嘱託という制度で、専門職として市役所に入られた方というのは結構いらっしゃったのですか。

国吉：全くそういうのも何にも知らないで入ったのですけれども、既に3人いたのです。

　1人は岩崎駿介さん。その前年12月にボストン市役所のアーバンデザイン・チームから来て、田村さんの元でやっていたのです。私より8歳上で東京芸大の建築科を出ている。私の一サイクル前の60年安保の時代に、学生運動をやって、卒業後3年間、設計事務所にいた後、アフリカの独立の父と言われたエンクルマ大統領にあこがれて、ガーナに行き、そこで、アーバンデザインという世界がある、と気が付いてアメリカのハーバード大学のアーバンデザインのマスターに入る。その頃、アメリカの各都市が建国250周年記念か何かで一斉に、まちを魅力的にする動きがあって、ボストンでは、そのためにプランナーとかデザイナーとかが集められて臨時に組織されたアーバンデザイン・チームに、岩崎さんも入ったのです。そういう経験をして「アメリカ流のアーバンデザインというものを日本も勉強すべきだ」という意欲に燃え、

それを普及させる突破口はないか、というふうに考えていた時に、ある意味、エンクルマに近い飛鳥田という人が市長をやっている横浜市に、昔から多少知っている田村さんがいる。それで横浜市に入り込んだ人です。ですが、私は岩崎さんがいることは知らなかったのです。　ほかに、企画調整室の中に都市科学研究室というのがまたあって、そこの室長も多分、嘱託だったと思います。それから、東大都市工学科の修士が2人ぐらい、学生でいながら、週2日ぐらい、勉強させてくれ、ということで嘱託で来ていました。そういうことは全く知らないで、とにかく居候させてもらって、役所の活動を通じて、社会はどういうふうに成り立っているか、というベーシックなことを体で感じよう、ということだったのですね。

鈴木：入られた当初の雰囲気と、アーバンデザイン・チームの設置の経緯について、お話しいただけますでしょうか。

国吉：田村明さんがつくられた企画調整室は、役所の組織が縦割りで別々になっているところを、うまくつないでいって新しい企画をつくる、というような目的がメインで、役所の中の旧態依然とした、国に従うような慣習を全部、断ち切っていくとか、いろんな仕掛け、役所の人間そのものの改革からしていく、ということが必要だったのです。

それと、一方で、田村さんが何かやろうと思っても、みんな付いてきてくれないので、付いてきてくれる部隊を作らなきゃ駄目だ、ということで、役所の中の係長級の元気のいい人を引っ張り上げる、ということがかなりあった。それから、学生運動くずれ、という言い方は失礼ですけれども、70年安保で何かやろうとして挫折した人が、もう一回、何か具体的なところで活躍しようと市役所に多数入っていて、その中の元気な人を引っ張り上げたり、東大闘争でもまれた東大の都市工の人たちとか、いろいろなタイプの人が混ざっていました。

鈴木：梁山泊みたいな感じですか。

国吉：そうなんですよね。向こうも僕のこと、変わったタイプだと見ていたと思います。そういう中で、私と岩崎さんは正職員ではないですから、正職員のいる部屋とは別に、作業室というのがあって、そこに閉じ込められていたのです。

鈴木：一緒にいられなかった、それともスペースがなかった。

国吉：スペースがなかったか、いさせていただけなかったのか、どちらか分かりませんけれど。

鈴木：かなり不遇ですね。

国吉：不遇とは思わなかったですね。好きなことを勉強させてもらって、給料くれるのだから、いいな、と思っていました。

そこで田村さんに「この人とチームを組みなさい」と岩崎さんを紹介されたのです。そういうキャリアも知らないから、「この人と二人でまちのデザインのことを考えろ」と田村さんから言われて、私は「この人と?この人、デザインできるのかな」とつい失礼ながら思ったり、「デザイン力は俺の方が絶対上だから」と思ったりして、生意気でした。

田村さんはプロジェクトとかコントロールとかに精出されて、6大事業や宅地開発要綱ということを仕掛けられてはいましたが、「もっと都市の個性みたいなものをつくらないと、東京の傘下からはなかなか脱しえない。やっぱり、何か違ったやり方もすべきだ。都市の自立の一貫として、その戦略として、都市の魅力というものを大にしたい」というふうに思っておられたのだと思います。

それで田村さん自身は、万国博覧会のお手伝いをした関係で、メタボリズム・グループという建築家のチーム、丹下さんは入っていませんが、磯崎さん、槇さん、大高さん、菊竹さん、黒川さんという人たちとも付き合っていたので、取り敢えずはそういう人たちに時々アドバイスをもらう、というぐらいのやり方をとっていました。

ところが、岩崎さんの考えていたアーバンデザインは、そういう超一流のデザイナーに頼るのではなくて、自治体そのものがやっていくのが本当のアーバンデザインで「それをボストンではちゃんとやっていますよ、日本でもやるべきです」というふうに田村さんに説得したのでしょうね。それで田村さんから「じゃあ、やれるかどうか、岩崎君、やってみろよ。今度来たあいつも使ってやれ」というふうな感じで、岩崎さんと私のチームができた、ということです。

鈴木：アメリカのアーバンデザインについて解説しますと、1958年にハーバード大学にアーバンデザイン学科というのができて、アーバンデザイン・カンファレンスというのが盛んに開かれるのです。その初期の頃はどちらかと言うと著名な建築家がそのまちについて語るようなものが多かったのですが、1960代半ば頃になると、「じゃあ、どうやってまちをデザインしていくのか」と、行政やプランナーの人たちの、実践的、実務的な議論が多くなってくるのですね。岩崎さんはアメリカの状況も大学で勉強して、なおかつ行政で働いた経験も持ってこられたので、そういうアメリカのアーバンデザインの流れが横浜に持ち込まれたのではないでしょうか。

話を戻しますと、アーバンデザイン・チームが正式に設置されたのはいつですか。

国吉：1971年（昭和46）5月、私たち二人、初めは嘱託で、「アーバンデザイン担当」ということでした。それでも結構、残業するわけですが、嘱託には残業手当が出ないのです。僕はそれでもいいと思っていたのです、これで十分だ、普通並みの給料くれれば残業手当なしでも、これでいい、と。そうしたところ、心優しい企画調整室の方々、学生時代、暴れていたような方々が「いや、残業手当が出るようにちゃんと職員になった方がいいんじゃないの」とけしかけるのですよ。「7月に試験があるから受けたら」と言われて、受けたら通ったのですよ。

今と違いましてね。今は40倍とかで難しい。私の頃は高度成長真っ盛りですから、企業は景気がよくて給料がいいですから、役所には誰も行かない。ですから、横浜市も建築系の学生、職員を採るために、いろいろな遠方の地域に行って、工業高校出身の人に来てくださいとスカウトしたり、という時代だったのですね。だから競争率は3倍程度で、試験勉強はほとんどしてなくても通っちゃう、ぐらいの感じ。建築の図面は一生懸命、書きましたけれど。

それで通ったものですから10月に職員に。当時、10月採用というのがあったのです。住宅地開発がどんどん進んで職員が足らないですから、10月採用が20人ぐらいあって、私も切り替えられたのです。残業手当が出るようになったら、岩崎さんが「君、残業手当が出ていいね。俺もなろうかな」とか言い出して。それで田村さんに言って、岩崎さんは次の年の4月から職員になったのです。岩崎さんはキャリアがあるから、無試験です。最初から主査で、すぐに副主幹になりました。

鈴木：いい時代ですね。1971年の10月に出た『SD』という雑誌に載った「基地的地域空間の構造化」という記事で、岩崎さんと国吉さんの肩書きは「横浜市都市科学研究所員」で、「都市デザイン・チーム」ではなかったわけですね。

国吉：そうなのです。そういうところはいい加減で…。企画調整「局」になる前、企画調整「室」で、その室長は田村さんではなく、別の温厚な方でした。田村さんをいきなり室長にすると抵抗があるから、と。田村さんは企画調整室企画調整部長という肩書きでした。で、企画調整部長の下に企画課と調整課という二つの課があって、企画課がプロジェクト、調整課が土地利用コントロール、実は細かく言うと、調整課の中に土地利用担当副主幹というのが付いて、調整課長は総務課長みたいなことをやっていた。一方の企画課は、プロジェクトということで、6大事業なんかの仕掛けをしていた。

私たちUD（アーバンデザイン）チームは企画課の下に付いて、企画課の支店みたいな感じ。調整課と企画課が本体で、UDチームが相変わらず作業室という感じです。

鈴木：国吉さんがUDチームとして一番最初に取り組まれた仕事は、本牧の仕事でしょうか。

国吉：そうですね。本牧は建築学会のコンペで、私も関わった場所です。

UDチームには、最初から何か仕事があったわけではなくて、本牧をやる前に、岩崎さんが事前に相当、作業していたのです。都心部のフィールドワーク、フィールド・サーベイというのをやっていました。5,000分の1ぐらいの地図に、関内地区にはどこに坂道があるか、とか、街路の太さがどのぐらいか、とか、道路空間を中心としたものと、地形がどうなっているか、とか、まちを知るための、そういうベースの資料が案外ない、というので、それを歩いて回ってつくる、という作業をかなり、ひとりでやっておりましたね。それを途中から私も加わる、という感じでした。
道路の何メートル以上のものがどういうふうに分布しているか、とか、坂道がどこにあるか、とか。彼は「やっぱり歩行空間は大事にしなきゃ駄目だよ」とかよく言っていて、最初にその大事な歩行空間データとなるようなものをまず作る、という作業を、委託費もないから自分で足を運んで作っていたのです。

鈴木：ちなみにそういう資料を見たことがある、という人が昔の方で結構いらっしゃって、私と北沢猛先生と調査したら、コピーが一部、あったぐらいなのですが、今は市役所にない、ということでしょうか。

国吉：もう何回も引っ越しているので…。

鈴木：残念ですね。この資料は、街づくり協議地区という、エリアを決めて、建物を建てる時にどうするか、どれぐらいセットバックするか、とかいうことを事業者と協議する仕組みがあるのですけれど、その前段の、地区レベルのまちづくりの方針を検討するための資料集の中から出てきたものなので、このような作業は、街づくり協議地区制度に生きていくのだな、ということを感じたのですけれど。

国吉：その後、ようやく本牧が動き出すわけです。僕が入った1971年（昭和46年）ではなくて、1972年（昭和42）ぐらいですかね。それで、地元の集会なんかにも出ろと言われて。実は、飛鳥田さんは社会党の市長だったから、米軍基地を返還してもらう運動をやっていたのです。飛鳥田さん、鳴海さんは社会運動として接収解除運動をやっていて、結局、それも田村さんが担当することになり、じゃあ、都市デザイン・チームもやれ、と言われて、その運動にも加わることになった。私どもが結構、暇だろうということで。それで当時あった渉外部というところと一緒に、接収地をずっと見て回ったのです。

これはよかったのです。『SD』の岩崎さんの記事に接収地のマップが付いていますね。これだけ当時、接収地があって、これを見て回って、おぼろげながら「ここをどうしたらいいか」みたいな構想をみんなで作るとか、そういう非公式のプロジェクトがあって、それにUDチームも加わったのです。横浜の土地勘のない私も岩崎さんも、これを見て回ることによって土地勘が出てくる、と言いますか、まちのロケーションというものが分かった。それが大きかったのです。

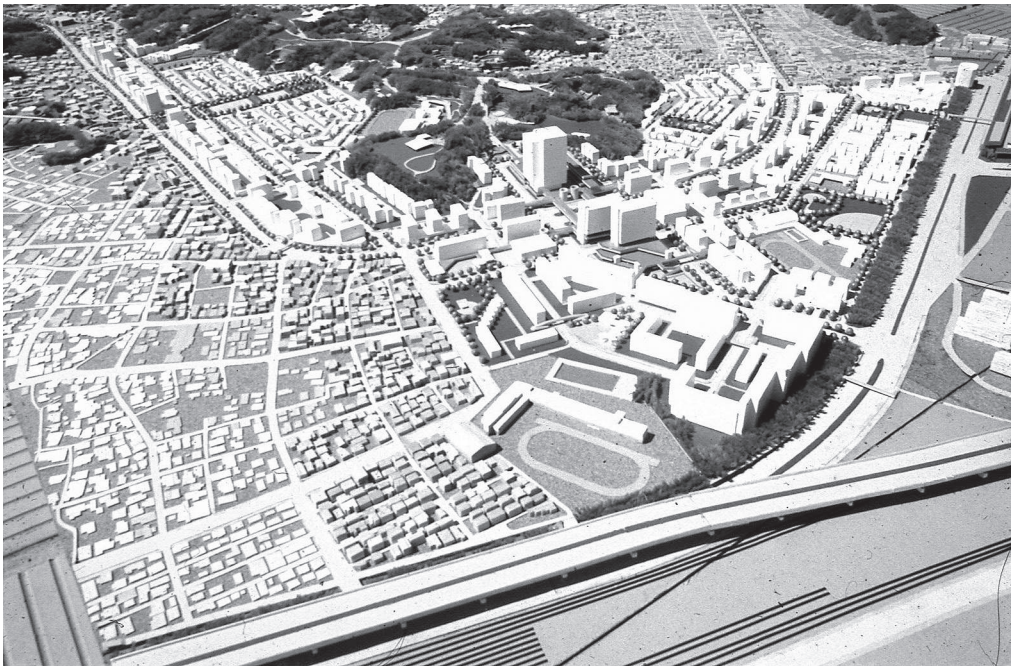
本牧では、具体的に作業に加われ、と言われました。先程言いましたように、道路もない、何もないところが返還されるわけですから、道路を造ったり公園を造ったり、あと、街区を作ったりする。これは一般的なまちをつくる時の区画整理という手法でやる、ということで区画整理課というところが担当するけれども、それにUDチームが加わって一緒に、何ができるか提案しろ、というのが田村さんの宿題でした。

それで岩崎さんと私の最初の仕事は、新本牧地区のスタディーをする、ということですね。それで、どういう街区構成で行くべきか、ということを考えるために、ニューヨークのまちの街区割、桜木町周辺の街区割とか、中区の住宅地とかスタディーする、ということもやったのです。**【図1】**

選択換地でまちにメリハリ

一番大きかったのは、換地の方法です。通常の区画

図1：本牧接収地跡地模型



整理は、普通、自分の土地のだいたい3割は取られる。「3割減歩」とか言いますが、その3割の土地は、道路用地とか公園用地とかに当てて公共空間をつくる。残り7割の自分の土地は、どこかの街区となって分散されていく、というものです。土地を供出することで、全然何もなかったようなところを、きちんとした道路をつくり、公園とかの公共空間を造り、そして住民は街区の土地をもらっていく、というのが区画整理なのです。土地をもらう時に、もともとの自分の土地のそばに土地をもらう、というのが普通のやり方です。現地換地、あるいは照応換地とか言います。

こういう換地が原則なのですけれど、これだと、均等なまちしかできないのですね。これでは、まちは面白くない。やはり、まちにメリハリを付けないとこれからは駄目だ、ということで新しいやり方にしたのです。本牧には、今後は商業地も必要だろうし、住宅地はみんなそれぞれ好みがあるだろう。一戸建ての低いのも、中層住宅地も必要だろう、と。それで現地換地ではなく選択換地にしよう、と。「選択換地」という言葉はその時出てきたのです。

みんな均等に減歩するのではなくて、商業をやりたい人は容積率の500%のところをもらって、それで大きいビルを建てたいでしょう。でも、静かな住宅地をもらいたい、という人は高さが10mぐらいで、容積率60%でいいんだ、という人もいるでしょう。そういう人たちみんな同じ、均等にする必要はない、ということで、みんなに希望を出させよう、ということにしたのです。一戸建ての低容積率、容積率の低いところだと減歩率は3割でいいけれども、高容積をもらうところは6割減歩でもいいじゃないか、とか。お金に直せば全部、均等になるから、ということで。

港北ニュータウンにつながる

そういうやり方ができないものだろうか、と区画整理課に我々が提案したら、後で精算すればいいから、何とかやれそうだ、ということになった。それは、区画整理法に違反はしない、それもできうる、というふうに見通しが付いた。

それで、選択換地という方式で高層住宅群もあれ

ば、商業地的なところもできるようにしたのです。通常ですと、もとが住宅地なら、区画整理しても、普通の住宅地しかできないものですけれど。容積量が高くできる、というようにメリハリを付ける区画整理を提案して、区画整理課と協働していった、というのが最初の仕事だったと思います。これが後に、港北ニュータウンの選択換地につながったのです。

鈴木：全体の配置プランで力を注がれたこととか、苦労されたところ、というのはありませんか。

国吉：国の土地がかなりあって、その土地をいかに公園用のところに追い込むか、ということがありました。国の土地を国に返さないで、横浜市が借りて公園にする、ということをどうやって国を説得するか、というのが一番苦労したのでしょうね。我々というのでなく、田村さんの戦略でしょう。それに向けて案を作れ、ということで。

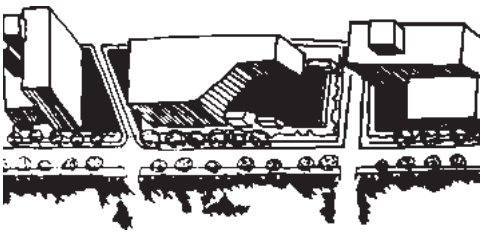
鈴木：国の土地を公園などの緑地にすると、そのまま無償で貸与される、という制度があって、当時、横浜市は財政難ですから、安上がりにするためには、国有地の部分をなるべく公園にして、買わないですむようにしたかったのです。

国吉：国にしてみれば、国の土地は売却してお金にした方が絶対いいわけですよね。そういうことを国が言ってくる前に、「住民も入れてこういう案を作りました。この緑地を成立させるには、国有地を全部ご提供いただかなきゃ駄目です」と言える雰囲気に持っていく、というのが一番大変だったのです。

鈴木：きょうお配りした年表の1972年12月に「本牧接収地・跡地計画・市側第一次素案完成」とあります。アーバンデザイン・チームができて間もない、本当の初期ですね。

国吉：作業は多分、1971年ぐらいからやっていたのでしょう。

図2：県民ホールと歩行空間のスタディ
出典＝『SD 別冊 No.22』、平成4年、鹿島出版



鈴木：これに続く、あるいは多少、並行していたと思うのですけれど、次にメインで取り組まれたのはどういう仕事ですか。

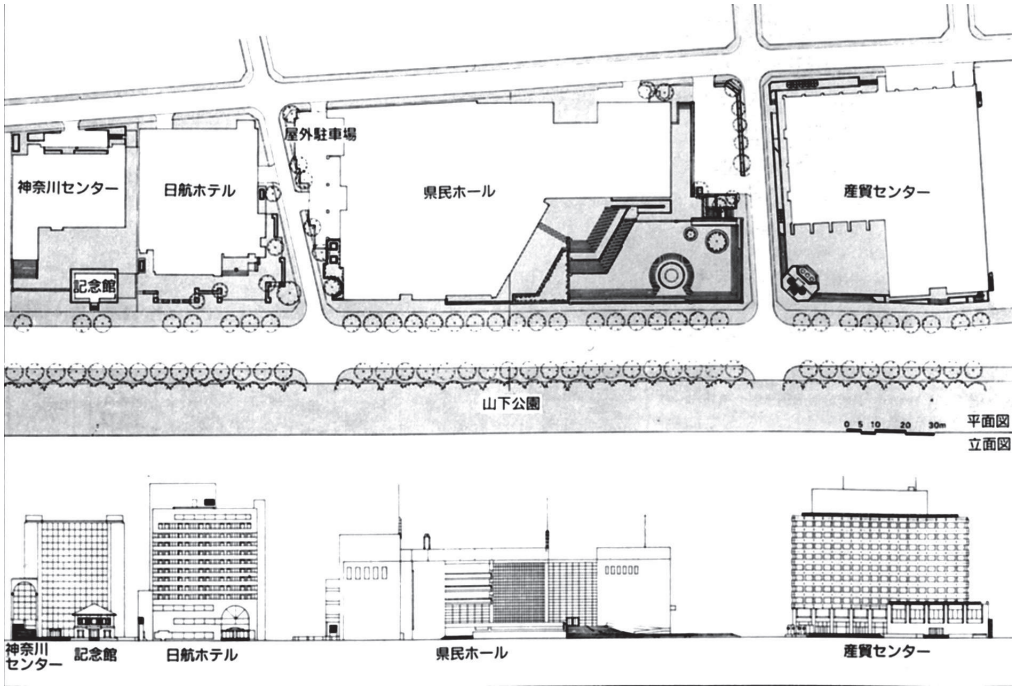
国吉：有名な高速道路の地下化は、UDチームができる前に田村さんがもう成し遂げていて、関内の真ん中を「緑の軸線」として確保する、ということまでの話はまとまっていました。そのあと、緑の軸をどういうものにするか、という計画については、我々が入った時に既に大通り公園設計委員会というものがあったのです。それは、外部の専門家を入れてご提案を頂いて、その意見を市の各局に伝えて刺激する、という仕組みで、その委員会からいろんな提案がなされて、その後をフォローする、という仕事が一つありました。

県民ホールの計画で駆け引き

その前に、山下公園周辺地区の計画と県民ホールのことがありました。県民ホールの計画の土地は、県と国と横浜市の土地で、全体の6分の1が市の土地だったのです。それで、その土地を譲ってくれ、と県が交渉に来たのです。国は、既に売ることを決めていました。

それに対して、岩崎さんと私はまず何をやったかと言うと、この土地に「横浜市国際青少年交流センター計画」というものを作ったのです。1週間ぐらいでワーッとやって図面を作った。それを県に持っていって「実は横浜市はこういう計画を持っているので、譲れない」というふうに交渉をしたわけですよ。それで、譲るのなら、いろいろ飲んでもらわなければ困る、という譲歩条件を出すのです。この地域の将来のプラ

図3：ペア広場と周辺建物の位置関係
出典 =SD 別冊 No.22』、平成４年、鹿島出版



ンを横浜市は作るから、それの第１号となって率先して協力してください、と。

具体的には、イチョウ並木を守るために敷地から3m後退するる。それから、県民ホールをつくると人がいっぱい出てくるでしょう。そういうところは貯まるような場所がないと、防災上危険だから、角にこういう広場をつくること。まず、この二つを飲むことが条件ですよ、ということで、すんなりとは譲らない、ということをやったのですね。

その頃の県と市の関係は、我々が思いも寄らないほど、県の方が力を持っていた時代ですから、県から言われたことには、まずは抵抗してからでないと、次のステップには行かない、ということだったようですね。ですからまず、けんか腰でやる、というやり方です。**【図2】**

産業貿易センターとペア広場

次に狙ったのが、産業貿易センターですね。産業貿易センターは最初、言うことを聞いてくれなかったのです。県民ホールはよかったのです。県民ホールの設計者は、日建設計の、やはり岩崎さんという人で、アメリカ帰りの方で、アメリカのプラザを造るとか、最近の傾向に熟知していた、勉強されていたのです。そういう方から見ると、都市デザイン・チームが言う話はもっともだ、ということで、すぐ理解してもらえたわけです。ところが産業貿易センターを設計していたのは三菱地所の設計部の方で、それなりに有名な人ですけれど、建築のデザインに対して役所からつべこべ言われたくない、ということで相当お怒りで、相手にしてもらえなかったのですね。それで大変困った、ということがありました。

県民ホールと産業貿易センターの間のところはペア広場**【図3】**になっていますが、そこを「素材まで同じようにしてください」と言うと、「おれのところは石の広場にして、御影石でやるから」と言って抵抗した。それで、産業貿易センターは、市が株主として入っているので、株主として産貿センターに注文つける、と

いうことで説得しました。

隣のホテルも協議に入れる

その二つの計画ができたことにより、山下公園周辺は大きく方向ができて、これによって次々と他の施設へも連鎖していきました。この二つが協調しますよ、というのでザ・ホテルヨコハマ（現ホテルモントレ横浜）、最初は日航ホテルという計画でしたけれども、そこに対しても同じように「お宅も付き合っていただきたい」と。その時はこの二つも既にオーケーを取っていますから、ということで、ほぼ同時に進んでいた日航ホテルの計画に注文を付けた。日航ホテルの設計を担当していたのが、後に馬車道を担当する高橋志保彦さんという人でした。

県民ホールと産貿センターの了解がだいたい取れると、今度は日航ホテルに対しても提案してください、と言って、こちらからも要求を出してだんだんと変えてもらいました。県民ホールとホテルの間に公開空地を取ったのですけれど、そこを県民ホールの搬入のためのトラックが出入りするようになる。日航ホテル側に「トラックが止まるところは、あなたのところの前面でしょう。だから4者協議の中で提案してください」と言って、私どものチームに設計提案をしてもらったわけです。それで、トラックがむき出しでは困るから、ジクザグの植え込みをつくってくれ、という提案がある。それを、我々が設けた4者協議の場で我々から「県民ホールさん、この提案を受けてくださいよ」と言う。そういうようなつなぎ役を引き受ける、ということがありました。

鈴木：その戦略は田村さんが指示を出して、それをアーバンデザイン・チームで実行する、という形ですか。

国吉：何を確保したいのか、というのは我々都市デザイン・チームで、岩崎さんが中心となって、私が協力する。それを確保するための相手の当事者を巻き込む戦略は田村さんが作る、ということだったのです。

鈴木：国吉さんが市役所に入られる以前に、環境開発センターで山下公園通り付近のスタディーをした図が残っています。これを見ると、山下公園周辺地区を戦略的な地区として考えている。北沢猛さんも、横浜のアーバンデザインの原点はやはり山下公園だ、と話していました。当時、この山下公園しか市民に開かれた水辺の空間はなかったはずですから、やはりここのところを何とかしなければいけないな、という認識はあったのではないか、と。田村明さんからも似たような証言があったのですけれども、当時、やはり、そういう思いは企画調整室、あるいは局の中でもあったのでしょうか。

国吉：そうですね。当時の馬車道などは大したことのないまちで、中華街もばらんばらんでしたし、みなとみらいを仕掛けると言っても、まだおぼろげな状態で、横浜を空間的に再構築するとなると、大さん橋と山下公園の界隈ですよね、ここは横浜の顔だ、やはりシンボルになる空間だろう、というのは共通の認識でしたね。特別な場所、みたいな認識があって、市としても、これは頑張っていかなければ駄目だ、ということで、一番、横浜市の中では行政主導でやってきた場所だ、と言えます。馬車道とか元町は、地域の自発的なものをフォローする、というやり方でしたけれども、山下公園のところは、地元もしっかりしてないし、どんどん転売されているところですから、横浜市が「ここは横浜の顔ですから」と主導的につくっていくべきところだ、ということはみんな認識していた。そんな議論はあったと思いますね。

鈴木：ちなみに、環境開発センターが手掛けた、この山下公園周辺のスタディーの図面は、見た記憶はありますか。

国吉：ええ、ありますよ。環境開発センターが作った図はいっぱいありましたからね。だけど、僕の目から見ると、よくある、都市計画のコンサルタントが描いている図面の一群の一つに過ぎない、ぐらいの感じで、戦略性が深いものとは、私の当時のレベルではあまり認識できなかったのだと思います。

鈴木：この環境開発センターの図は、その後の3mのセットバックとかの話につながるような絵ではないので、恐らく、この絵はここでいったん切れて、アーバンデザイン・チームの中で、実際に山下公園周辺のまちづくりをどうしていくのか、という議論が重ねられたのではないかな、とおぼろげに推察していたのです。その3mセットバックするだとか、ペア広場を造るという発想は、どこら辺から出てきたのですか。

国吉：これはアメリカですよね。アメリカのボストンとかニューヨークとかサンフランシスコとかのアーバンデザインを学んできた岩崎さんから提案です。

「一番大事なのは、既存のまちを生かしながら、大規模開発しないで、まちを変えていくことなんだ。それができるかどうかがアーバンデザインで一番大事なことだ」というのを常に岩崎さんは言っていました。これ（環境開発センターのスタディー図）は、どちらかと言うとプロジェクト型なのです。大規模なものをワッとつくっちゃおう、という感じでしょう。それとは違って、現状の骨格を保持しながら、それを逆手にとって、逆に魅力にしていくやり方もあるんじゃないか、と。それはアメリカの当時のアーバンデザインの一つの流れであって、それを何か横浜で試してみよう、というのが岩崎さんの考えだったと思いますね。

鈴木：岩崎さんはその後、市街地環境設計制度という、高度地区を抜くルール（高さ制限を緩和するための条件）の制度設計のためのスタディーの図面を描いているのですけれど、ペア広場を造った時には、そういう高さ制限を抜くには広場を設ける、という形ではなかったわけですよね。

国吉：県民ホールを造った時はなかったのです。先程言ったように、広場は駆け引きで取ったのですね。だけれど、それは言わないで「県にも協力いただいた」というふうにしました。

高度地区を抜くルールは、1973年（昭和48）に新用途地域という制度が作られたことと関係があります。容積でまちをコントロールしていけば、まちはある新しい形のバランスが取れる、ということで全国に容積率制が適用される、という時に、横浜市の中で用途地区指定のためのプロジェクト・チームがつくられ、我々UDチームもその中に入ったのです。

建築局がメインで、建築局の審査課、都市計画課、調整課とか入っているチームで、UDチームは、商業地区指定のチームになったのです。私と岩崎さんと二人で、当時の全市の商業地区、近隣商業地区全部歩いた。そうすると、先ほどの接収解除地のスタディーの次の、全市を知る機会になりました。旭区や瀬谷区の小さいまちまで行って、まちの感じを見て、それから実際の使われ方、容積率何パーセントまで使われているか、とか。その数字は、コンサルタントに出した調査がありますから、そういうのを見ながら、ここは容積率、何パーセントがいいな、という案を二人で作るわけです。そういう作業をさせられたので、地区ごとの容積率の様子はだいたい分かっていました。

まちは動いていくものだ

国の方ではそれと同時に、総合設計制度ということに取り組んでいたわけです。この制度は、アメリカのニューヨークのプラザ・ボーナスのシステムで、広場を取るとか、歩道を広げるとか、そういうことをすると、その内容に合わせて、高さや容積率の緩和とか、そういうボーナスを上げますよ、というものです。

岩崎さんからそういう話はもう聞いていて、そういう制度があるといいね、とか言っていました。岩崎さんは、ドイツのBプランという、このまちは2階建て、形もこうと決めて、それしか建てられない、というやり方を日本に適用するのは難しいだろう。アメリカのように、ベースの容積率が500%のところで、頑張れば650%までになりますよ、というようなやり方で、貢献した人にごほうびを上げる、というやり方の方が今の日本にはふさわしい、と感じていたようです。「まちは動いていくものだ。成長していくプロセスの中で、社会貢献度の高い建物を増やしていく、というシステムがいいのだ、固定する必要はない」というのが岩崎さんの考え方ですね。

そういうスタディーをしている時に、横浜市は、総合設計制度だけでは駄目だ、ということで市街地環境設計制度という新しい制度を作ろうとしたわけです。建設省からは、容積でコントロールするから、もう高さ制限はいらないだろう、というふうに言われたわけ。ところが横浜市は、これはやはり田村さんだと思うのですけれど、高さ制限は撤廃しない、としたのです。それの発想の原点となったのも、アメリカのやり方です。

市街地環境設計制度の背景

その頃、一番大きかったのは、日照問題でした。高さを緩和すると日照問題がもっと出てくる、ということで、日照問題を解決するためにも、高さ制限は持っていて、日照問題を起こさないように緩和する。そういう緩和という形だとコントロールできるだろう、と。

田村さんが考えたのは、制限は掛けて、緩める時にコントロールすればいい、というやり方です。アメリカ流のやり方を、高さの問題でも採り入れたらどうだ、という発想をして、高さ制限を撤廃しない。そうすると、総合設計制度の緩和というわけにはいかなくて、高さ緩和が入っていないから、高さ緩和を入れたものを横浜市として持たなければ駄目だから、必然的に総合設計制度は使えないね。だから市街地環境設計制度という、二つの部分の緩和をする新しいシステムをつくろうとしたわけです。

制度づくりのスタディーの対象

つまり、ちょっと意地汚いようですが、お金のない横浜市の中で、歩道を広げたり、公開空地、広場を取ったりするには、そういう工夫でもしなきゃできないな、ということでそういう戦略を取った、と。それにちょうどピッタリ当たったのが産業貿易センターです。あれが多分、市街地環境設計制度を作る時の、ほぼ最初のスタディーの対象になったと思います。制度適用の第1号は別かもしれないけれど。

それで高さ31mを45mまで緩和する、容積率も緩和する、というダブルのボーナスを与えることにしたわけです。単にお願いあるいは力ずく、といったことではなくて戦略的にやる。そこに市街地環境設計制度を効果的に運用する、という手法が付け加わっていく。一方で、地域の皆さんにも協力してもらう。そういうふうに四つぐらいそろってくると、みんなの理解が深まっていって、地域のガイドライン的なものも地域に認められていくようになっていったわけです。

鈴木：高さの制限をして、それを緩和という形でコントロールするという考え方は、やはり田村明さんの発想だったようですね。高度地区を導入する前は絶対高さ制限で、その時代でも、特例許可で高さを緩和することができたのです。その仕組みを活用して、市内のいくつかのビルで、歩道を広げるのに協力するとか、周辺の環境に貢献するような建物に対して、高さの特例許可を何件も出しています。それは岩崎さんが入られる前からやっているので、恐らく、もともと田村さんがそういう発想を持たれていて、それをきちっと、特例ではなくて、制度によって着地させる、というところを、岩崎さんのアメリカ流のアーバンデザインの知識を活用しながら組み立てていったのではないかな、と思います。岩崎さんもそういうようなお話を去年の講義でされていました。なかなかそういう議論は聞かないのですけれど。

山下公園の話は一旦切って、次に都心部のその他のプロジェクトと、くすのき広場のお話をお願いしたいのですが。

国吉：山下公園周辺地区は一番重要な場所であり、ほぼここに、いろいろなところの都市デザインの原点は入っています。ただ、動きは遅い、なかなか目に見える形にはなっていかない。県民ホールも土地のせめぎ合いみたいなところでまだとどまっている時に、「歩行空間を魅力的にする」というプロジェクトとして田村さんが考えたのが、山下公園と桜木町、関内、石川町をつなぐ歩行者のルートをつくることによって、歩く楽しさを市民に味わってもらおう、という仕掛けとして都心プロムナードをつくろう、というプロジェクトがあって、それを都市デザイン・チームでやりなさい、ということになりました。

実際は、割と私が中心で、岩崎さんはフォローしながら、私が任されてやっていった感じがします。最初、岩崎さんは、こういうのはボストンにあるよ、フリーダム・トレールというのがあって、ボストン中を赤い線を引いたのがぐるぐる回っていて、それを回るとボストンのいろんな魅力的なところを全部回っていかれる、というようなルートづくりがなされている、と言ったのですが、赤い線を引くのはボストンの二番煎じだから嫌だな、ということで、絵タイルを敷こう、ということになりました。

図4：絵タイル（プロムナードルート）
資料提供＝横浜市

絵タイルのことで勉強

歩道に何か模様を入れよう、ということで、材質は何がいいかと考えたのですね。マンホールなどと同じように鋳物で、とも考えましたね。川口の鋳物でグレーチングみたいに、と。でも鋳物でやると、絵があまりはっきりしないな、とか言って。でもとにかく絵を入れよう、と。それで結局、田村明さんのお友達が、名古屋大学だったか名古屋工業大学の教授で、加藤さんという焼き物の専門の方がいて、その先生と瀬戸の焼き物工場が連携して、焼き物のタイルでこの絵を表現することになったわけですね。**【図4】**

最初のルートは桜木町ルート、次に関内ルート、石川町ルート、と三つのルートをつくっていったのです。絵タイルを入れる、というのは岩崎さんも私も、ちょっと子どもっぽくて嫌だな、と言いながら、田村さんがやる、と言うからしょうがないな、と思っていたのですけれども、こういうのをすると、市民が喜ぶのですね、新聞や雑誌にも写真で取り上げられる。それはまた、勉強になりました。

例えば、2本目のルートなどは、市民から絵を募集すると、1,033点集まってきて、それから32点選んで、それがこういうふうに描かれているのですね。それを歩道に入れると、ご家族を連れて見に来る。なるほど、「市民が楽しく歩こう」と言うだけではなくて、興味をもってもらう仕組み、仕掛けはいろいろあるのだな、と。我々が頭の中で考えているようなプランニングだけではなくて、田村さんが言うような、喜んで興味を持ってもらうような仕掛けも一緒にかみ合わせながらやっていくのも大事なのだな、と感じました。

それと合わせて、こういうルートをつくると、例えば、日本郵船のビルの前を通ると、立ち止まって、ああ、こんないいビルがあるのだな、と思う人が出てくるわけですね。それで日本郵船に「皆さんが立ち止まっていますよ。前にやはり、ちょっと花壇でも置いたらどうでしょうか」と勧めたり。そういうことで、プロムナードを通じて、建物側に工夫をお願いに交渉に行くとか、そういうことをやったりしました。

土木事務所に「お百度参り」

都心プロムナードの実施は道路局の、中土木事務所というところが担当する事業だったのですね。初め、中土木事務所の所長に「これをやってください」と言いに行ったのですが、なかなかうんと言ってくれない。田村さんの力を使えば、うんと言うのですけれど。田村さんの権力だけを使うと駄目だ、と私は直観的に思ったものですから、土木事務所の所長のところにお百度参りしまして、二日に一遍、通う、みたいな感じで。「お前もしつこいな」と言われて通っているうちに「やってやるよ」ということになってくれて、土木の全面的な協力を得てやることになったのですね。道路局の幹部を通してやるやり方もあったのですけれど、それでも地元の土木事務所の所長の協力を得ないとできないものですから。必ずしも田村さんや岩崎さんからの要請ではなくて、私の立場からでもちょっとその

図5：サインポール（プロムナードルート）
資料提供＝横浜市

所長さんに泣きついて協力いただく。そういう形で個人的なルートも開拓しよう、ということでやりました。

このサインポールの絵は、亡くなられたグラフィック・デザイナーの粟津潔さんの設計です。粟津さんのデザインは、当初は、人形の形とか非常に具象的だったのです。ちょっと密教的なコンセプトで、非常におどろおどろしいデザインだったのです。私は「横浜に合いませんから、これは却下しますね」とか言ってバサッと切っちゃって、「もっと爽やかにしましょう」とか、「おか蒸気とか、横浜にちなんだものにしてください」とか言って、人形の形をしていたサインポールも少しシンプルにしてもらいました。非常にがまんして協力していただきました。**【図5】**

鈴木：ちなみに、このサインポールも最近、なくなりつつあります。道路のものはほぼ全部、撤去されて、今、横浜公園のところと－

国吉：あと、帝蚕倉庫の近くの角にあったのも無くなりました。

鈴木：そうですね。ごく限られたところに残っているのみなのですけれど、粟津潔さんも亡くなられて、そろそろ再評価される時が来るのではないか、と思うので、できれば残した方がいいのではないかな、とも思っているのですけれど。

国吉：サイン・デザイン業界からは、日本で最初の歩行者用サインだ、というふうに評価されていますね。

鈴木：いわゆるプロフェッショナルなデザイナーが絡んで作られたサインとしては、本当に最初期のものだと思いますね。全部なくしてしまうのは、寂しいものがあるな、と。

国吉：最初に作ったサインは1回補修しました。最初のは東京の工場で、鉄板を溶接して作ったのですが、すぐさびが出てきてしまう。それで途中で変更して、大阪の久保田鉄工に頼んで、鋳物で作ったのです。だから長持ちするのですけれど、長持ちするタイプがもうなくなっている、ということです。

それで、プロムナードで線を作って、線から面へ、街区へ、というきっかけにしよう、という考えでした。それで2本目のプロムナードをやっている時に、くすのき広場の事業が出てきたのです。

くすのき広場というのは、関内駅の前にあるわけです。大通り公園はまだできていない、緑の軸構想はできていましたけれども、そんなものは市役所の各現場は誰も意識していない。ですから、くすのき広場のあそこに、地下鉄の工事が終わって、地下の工事で掘った後は元に戻す、元の道路に戻すということになったのです。交通局に3,000万円の工事費で原形復旧させよう、と考えたのです。

原型復旧費が無駄にならない、と説得

そういう時に、道路局の維持課の係長さんが、我々のところに来まして「君ら、仕事がなさそうだね。今、市役所の横の、道路だったところを原形復旧させよう、という庁内の会議があるのだけれども、この空間について、もし意見があるのだったら、来て、意見を言っていいよ」というふうに言われたものですから、岩崎さんと二人でパーッと図面を作って、ここを歩行者の軸にすべきだ、という提案の絵を描いて持っていって、その会議に参加したのです。

そうして、結論を1週間待ってほしい、市長まで伺ってくるから、ということで、その案を田村さんを通

して市長まで上げたのです。ちょうど、次の年にアジア卓球というイベントが開かれる。その選手団が横浜市の前に来ても、集まれる場所がない。だからそういう広場は必要なのだ、ということと、今やれば3,000万円の原形復旧費を無駄にしないでできますよ、ということを説得材料にして、市長のオーケーも取った。それで元の道路に戻す原形復旧ではなくて「変形復旧」、変わった形に戻す、ということにしてください、というふうに道路局から命令を下していただいて、その3,0000万円に少しお金を積んでこの広場にする、ということにしたわけです。

いったん元の道路に戻して広場をつくると、またゼロからお金を積むわけですけれども、我々の提案ならその3,000万円が無駄にならないし、安上がりに広場ができますよ、ということが説得力になった。そして、広場と建築がバラバラな日本の中で、ヨーロッパみたいに広場と建築が連続する、ということも実験的に示そうということで、こういった広場ができました。

UDチームは二人しかいなかったのですが、時々、忙しい時は、その後に都市デザイン室長になった内藤惇之さんという調整課にいた方が、助っ人として加わって3人でやりました。最初、このアイデアを考えた時は3人でコンペをやったのです。私はちょっとひねった、アナーキーな案で、早稲田の建築を出ていますから、デザインを意識し過ぎていたのですけれどね。岩崎さんのはシンプルで説得力があって、この案が採用されたのです。その後、私と内藤さんは岩崎さんのドラフトマン的に、一緒に設計していった、という感じです。

その時は、設計委託費などないから、UDチームが急遽、設計事務所になったのです。関内第一ビルという教育委員会が入っているビルの3階の301会議室を借り切って、そこに4カ月ぐらい缶詰状態になって、毎日2時帰りとか泊まりとか。本庁舎には行かなくて、セーター姿で、地下の食堂と会議室を行ったり来たりするばかり。たこ部屋みたいなものでしたね。

それで、基本計画から実施設計ではなくて、いきなり施工図です。請け負った会社が待っているわけですよ。白石基礎といって、建築工事やったことがない土木工事屋さんで、いきなり「施工図を、あしたの仕事の図を下さい」と言って待っているわけですよ。それでもう、基本計画からいきなり施工図を描いたのです。

建築の設計と違うところは、現場で寸法を調整する遊びの寸法、ということですね。きちんと描いては駄目で、どこかに逃げをつくる。そういう場所をどこにするか、を考えましたね。

鈴木：最初のころの都市デザイン・チーム設置から、初期の都市デザインの試みの特徴みたいなものを、断片的でも構わないので、国吉さんから少し、述べていただけますか。

国吉：田村明さんとしては、どの程度このチームが機能するのか、というのは様子見のところもあった。まあ、温かく見守ってくれた、というところもあるのですけれど。一方で、一流の建築家、デザイナーを使っていろいろなプロジェクトを仕掛けていった、ということも並行して進んでいる中で、岩崎さんと私、特に岩崎さんは、どうやってそれと違う、本来のアーバンデザインの評価を受けるか、ということに躍起になっていました。やるのだったら、そこまでやらないと駄目だ、と。つまり、田村さんの下請けじゃ嫌だよな、という、田村さんから自立する、いや、田村さんの手のひらから飛び出る、そういうことをやりたかったのだと思うのですね。

とにかく短期間で成果を出そう

くすのき広場とか、壁面後退の問題とかを、どうやってやるかと言った時に、用途地域の指定とかは全市でやったのだけれども、全市でやるのはよそう。二人しかいないのだから、二人でとにかく関内地区だけで暴れまくろう、と。そこでとにかく短期間で成果を見せることによって、何かプロジェクトとは違う、アーバンデザインの流儀が若干でも感じられるようなことをつくるのに精出そう、ということで、意図的に、田村さんから言われない限り、関内地区周辺の既存市街地のリノベーションの仕組みとしてのアーバンデ

ザイン、と言いますか、それに徹する、ということを戦略的に考えよう、ということにしたのだと思いますね。だからちょこちょこと、山下公園周辺など、岩崎さんの仕掛けるところと、私は馬車道、商店街の仕掛けをどんどんやっていったわけです。

歩行空間という軸を中心に「坂名愛称事業」とかもやりました。これは岩崎さんの仕掛けで、その後入ってきた西脇さんとか北沢君が担当したのです。ただ、私がちょっかい出して、デザインは私がやっちゃったのですけれど。

そういうことで、歩行空間を街区として、公共空間側でどうつくり直すか、ということと、敷地の中で建築物がどう担うか、という2点ですよね。公共空間側と敷地側とで連携して、歩行空間をどれだけ豊かにしていくか、というのに取りあえず徹していこう、ということでしたね。

歴史的建造物の保存はぜいたく

戦後の廃墟が残る中で、歴史的建造物の保存というのはあまり意識しなかったのですけれど、今、山手十番館のところにあります山手資料館の建物のことがありました。今、建っているところの近くの坂下の方に建っていた西洋館で、その持ち主が横浜市に寄付したいから、市で使ってくれないか、と言って来られたのです。その時、フランス山というところの公園整備があるから、私としては、そこの公園事務所として使えないか、ということで検討したことがあるのです。その時は、企画調整室に高見沢という係長がいたのですが、その人と私とで担当して、活用策を起案をしたのですが、田村さんのところでも評価を頂けなくて、そんなぜいたくはできない、と没になったのです。

歴史的建造物を保存して活用するなんてぜいたくはできない、というような時代だったと思いますね。それを見かねて、十番館のオーナーの本多さんという方が「じゃあ、うちが引き取りましょう」ということで引き取っていただいた。

次に、山下公園通りに面したイギリス七番館で、その敷地に創価学会がビルを造る、という時には、その一部の保存活用をお願いしました。横浜市は金を出せないけれども、向こうがやってくれるのだったら、容積率の緩和もあるし、いろいろ工夫はするから、ということで、ちょっとお願いしたのです。横浜市ができなかったことを、民間事業の中で少しやっていこう、という例として創価学会のものが出てきた、と言えます。その頃までは岩崎さんが絡んでいました。

鈴木：その頃、調整課と企画課があって、企画課はプロジェクト中心で、6大事業の代表プロジェクトを動かしていたと思うのですけれど、アーバンデザイン・チームとの連携は、70年代初頭から半ば頃にかけてはどうだったのでしょうか。

国吉：連携というより、空間的な助言をするくらいで、企画課は独自に動いていましたね。

ただ「大テーブル主義」ということで、毎週、目標会議というのをやるのです。都市デザイン室に今もありますあのテーブルを田村さん以下みんな、我々下っ端も入れて囲んで、部課長が報告するのです。「これはやっぱり現場の担当の人がしゃべれ」とか言ったりして、我々も発言します。企画課のやっていることも逐次報告があるので、みんな一体となるんですね、コントロールの部隊も。ですから、逐次、プロジェクト部隊が何をやっているか、どういう進捗状況か、ということが分かる中で、このプロジェクトを仕掛けるから、ここのところをちょっとデザイン・チームで手伝ってよ、という感じでしたが、我々がプロジェクト本体に関わる、ということはなかったのです。そんなにデザイン・チームも余裕はなかったし、それなりにプロジェクトの正統派でやっているし、彼らも、デザイン・チームに頼らなくても、という感じがありましたし…。ただ、全体としての一体感はあった、ということですね。

ですから、コントロール部隊、プロジェクト部隊が何を動かして、どういうふうに仕組んでいるか。そういう中で我々デザイン・チームとして何を仕掛けていけば、彼らとうまくかみ合うか。彼らが動かしているのを見越した上で、デザインを仕掛けていくと、これはうまく行くな、というような読みはできたのですよ

ね。そういう連携はありましたが、やはり別の部隊として活動していましたね。

変則的な中で実質をやる

何せ、都市デザイン・チームでは、私の籍は企画課でなくて、プロジェクト室だったのです。私が正職員になってすぐ、10月にプロジェクト室というのができて、そこの室長が来て「あんた、うちの職員になったからね」と言われたのです。「あっそうですか、そこに行くのですか」と言ったら、隣の岩崎さんが「彼は行きませんから、私の下で働きますから」と断言しちゃってね、それでその通りになっちゃった。その時はまだ岩崎さんは嘱託でしたから、嘱託の岩崎さんの下で、職員の私が働く、戸籍は別の課で、プロジェクト室に所属している、という変則的な状況でした。まあ、戸籍がどこでも構わんわ、と私は思いましたけれどね。そういうイレギュラーな、とにかく実質でやる、みたいな。だから、誰が嘱託で誰がどうのこうの、というのはあまりこだわらずに、チームとして運営していった。そんな状況です。

それで、企画課に若竹馨さん（当時は三木さん）という人がいて、岩崎さんはしばらく職員ではなかったものですから、岩崎さんの下にいながら、企画課の若竹さんが人事面での僕の管理者、というような、何か変則的な状況でしたね。

鈴木：国吉さんのお話は3回ありますので、次週、その次の週と、またこういう形で進めたいと思います。

国吉：きょうは序盤戦の話でしたね。

鈴木：ここら辺の話は、断片的には都市デザイン室の現役の方は聞いていたりすると思うのですけれど、何か質問とかコメントとかありますか。

質問：職場では時々、ところどころの話しか聞かれなかったので、始まりの時の話を聞けて本当によかったなと思っています。

お聞きしたいのは、学生の頃、建築デザインをやられていて、多分、建築デザイナーとしての思いとかも強くお持ちだったのではないかと思うのですが、それが都市のデザインの中で建築デザインに係わっていく時に、個人的な建築デザインへの思いと、多分、どこかで折り合っていかなければいけないのではないか、と。都市に関わることで、建築デザインに対する思いがこう変わったな、とか、そういうところがあれば、ぜひ教えていただきたいな、と思います。

国吉：都市と建築というものがうまく融合する、みたいな期待は最初なくて。ちょっと行政の中で体験して建築に戻れば、建築家としてもう一回、充実した仕事ができたと思うのですけれども、新しいアーバンデザインという考え方が既にヨーロッパ、アメリカでは動いている、ということは、また新鮮だったわけです。だから、建築家がもうちょっと工夫すれば、まちもよくなるんじゃないか、という建築家主体のまちのつくり方を試行しよう、そのきっかけをつくろう、と思って役所に入ったのですが、もっと別の攻め方がある、というのを知り、非常にびっくりしました。

3年間やろうね、と言われて

岩崎さんと私の間で、プレゼンテーションでやつつけられたりしていくプロセスがあったりして、そういうところで、建築家的なプレゼンテーションではない、都市デザインのプレゼンテーションで、相手を巻き込んでいく、とかいう話をしてくると、これはもう建築の単体で勝負する話とは全然違う問題だな、というのは非常に感じましたよね。

岩崎さんが「とにかくそれを運動しようよ、国吉くんも手伝ってよ」と言うから、その運動に、じゃあ加わってみよう。岩崎さんはとにかく3年間やろうね、と言っているから、3年間はそれに付き合ってみよう、と。それが終わってもう一回考えて、建築に戻ればいいや、と思ってやっていたのです。

岩崎さんは途中で別の発想をして、市をやめ移っていくのですけれど、僕としては、3年でやめるべき

問題ではなくなって、これでやめちゃったら、せっかく炎が着いたのに消えてしまうのはもったいないし、横浜で少し動き始めたのだから、これを続ける、そっちの方から攻めていこう。まずは都市の方から建築の方に攻めて説得していって、建築家を仲間に引き入れる、という立場に立とう、というふうに考えたわけです。建築のやろうとしていることは分かっているから、建築家の心はわきまえた上で、建築家の心を尊重しつつ、まちに参加してくださいよ、と言う立場になったわけですね。だから、そっちの運動にのめり込んでいったから、もう建築だけに没頭するわけにはいかない、という頭の構造になっていったのかな、と思いますけれどもね。

自分好みでは説得できない

ただ、やはり建築的な空間の、何というか、発想みたいな、こだわりみたいなものは、結構あったりはしましたけれども、それを出すと、説得力がなくなるわけですよ。「国吉好み」を出しちゃったら、すぐにボロが出ますから。誰にでも分かってもらう、地元の人にでも分かってもらえるようなデザインの示し方というのをしなきゃ駄目だ、というのは、岩崎さんとのやりとりの中でいろいろ学んできたわけです。

本牧をやっている時、ある街区を、田村さんから言われたから、と言って岩崎さんが「ここを国吉くん、やってよ」と言うから、僕に任されたかと思ったら、隣で岩崎さんが同じところをやっているわけですよ。1週間たってから、両方、提案しましょう、ということになるわけですよ。

そうすると、僕は早稲田の建築を出たばかりだから、このデザインはいかにいいか、とか言ったのですが、それは何の説得力ない。岩崎さんは「建築基準法上はこういう形になるけれども、むしろこうやった方がまちとしてもっと魅力が出る」とかいろいろ、制度上の問題を駆使しながらやっていく。「岩崎好み」は何も出てこないわけです。僕のデザインは「結局、君は自分の形がいい、と言っているだけじゃないか。そんなの、アメリカなんかじゃ通用しないから」と。

つくりたい空間があったにしても、それは出さないで、社会の仕組みにとってこれが必要なんだ、ということで説得していかないと、社会化しない、と。結果的にやりたいことを言ってもいいのだけれども、やりたい形はこうです、とは誰も言わないのですよ。アーバンデザイナーとプランナーというのは、そういうふうに賢くやらなきゃ駄目なんですよ、というふうに教わりましたね。

質問：鈴木先生にお伺いしたいのですけれども、岩崎先生が持ち込まれた、実践的に活動されたアメリカのアーバンデザインと、横浜のアーバンデザインと違うのではないかな、とちょっと思っているのですけれど、その辺はどう思われますか。

鈴木：いろいろなものの見方があると思いますけれど、アメリカでは、それぞれの都市が国によって統一された法律で動いているわけではないのですね。ビルディング・コード、日本で言う建築基準法のようなベーシックな法律でさえ、その都市、都市で異なるわけです。ですから、その都市で有効な議論が、別の都市へ行って有効とは必ずしも限らない。ある意味、そこで多様なアーバンデザインというのが試されてきた背景があるのですね。

ですから、理論という意味では、どちらかと言うと、東海岸のボストン、あるいはニューヨークはどちらかと言うと飴とむち、規制と緩和でもって、高層ビルを建てる時にボーナスを上げる代わりに広場を造らせる、とか。サンフランシスコなどは、どちらかと言うと、それより強い規制で民間の開発を動かしていく、誘導していく、というような形で、いくつかの流れがあるのではないかな、と。

質問：そういう目で見ると、横浜はやはりボストン的なのですか。

国吉：空間的には、やはりサンフランシスコがイメージとしてはありましたよね。仕組みとしてはボストンとかニューヨークの仕組みを採り入れながら。

鈴木：途中からは独自の発展を遂げているのではないのかな、と。その時々にいろいろな情報を仕入れて、見習うべきところは見習っていると思うのです。

質問：県民ホールのセットバックの際に、急遽「青少年交流センター」の案を作られた、ということですけれども、これは本当に思い付きというか、そういうものなのでしょうか。

国吉：「壁面後退」なんていう考え方は今までないわけだから、いきなりそういうものを持っていっても相手にされないと。県と市との関係は、今よりも県は力強いから、とんでもない、という。力ずくで、金で、勝負してきたら、抵抗できない、というふうに読んだのでしょうね、田村さんは。だから、横浜市として壁面後退等を勝ち得るためには、こちらから別の何かを工夫する、という戦略を取ったのです。

質問：当時としてはかなり斬新な計画ではなかったのですか。

国吉：そうでしょう。そんな戦略を自治体で考える人はいないですよ。

鈴木：ある意味、田村さんは、地方自治の確立ということにも、ものすごく力を注がれていたので、ここで都市デザインを語る時に、田村さんと言う場合、地方自治の確立を目指された田村さん、という面とセットで考えるべきだと思いますね。

国吉：横浜市の立場をちゃんとつくっていく、発言権を高めるために、いろいろなところでやっていかなければ駄目だ、ということで、それを背景にアーバンデザインもやるんだ、という考えだったのでしょうね。だから、けんかをふっかけるのは当たり前みたい、「そうじゃないと相手になめられちゃうから」という感じでしたね。

鈴木：では１回目はこれまで、ということで。次回以降、できれば、失敗談みたいなものを一緒に話していただけたら。というのは、通常、行政が残す記録だと、うまくいかなかったことについてはあまり触れないのですけれど、実は敗戦から得るところが結構多いと思うので。話しにくい面もいろいろあるかもしれませんがー

国吉：そうではないのですが、あまり失敗しなかったので。つまり岩崎さんも私も、我々のチームはアーバンデザインの先駆者だと思っているので、変な失策をするとその流れが潰されてしまう、ということで、あまり無理して失敗するよりも、点数は低くても確実に点数を取り、持続発展させよう、という意図があったと思うのですね。でも、失敗も少しはあるでしょう。

鈴木：では、次回もよろしくお願いします。